

## アウグスティヌスと悪の問題

——弁神論の歴史的・比較思想的研究に向けて——

平尾昌宏

一

この世の悪、悲惨さは、世界を支配するはずの神の責任ではないのか。なぜ私がこのような悲惨な目に会わねばならないのか。神も仏もないものか。

こうした問いを整理し、二つのギリシャ語、神 $\equiv$ テオスと正義 $\equiv$ ディケーとを結合させた弁神論 *Theodicee* という名を与えたのはライブニッツである。だが、この問題はライブニッツに始まるものでも、西洋に限られるものでもなく、旧約聖書の『ヨブ記』や司馬遷の『史記』にも現れている普遍的な問題である。ただ、これがかもつとも先鋭なものとなるのはやはり、この世界を、全知全能にして善意を持つ人格的な唯一神がその倫理的な行いとして創造したものであるとするキリスト教においてである。した

がって、多くのキリスト教思想家がこの問題に取り組んでいるが、ここでは、その原点に位置するとも言えるアウグスティヌスに焦点を絞りたい。それによって弁神論の歴史的、構造的な比較研究の基礎となすためである。

アウグスティヌスは若い頃から悪の問題に苦しみ、その解決のためにマニ教や新プラトン主義を遍歴する。善悪二元論の立場を取るマニ教は悪を実体的なものとして考える。一元論の新プラトン主義では、悪は善なる一者の流出の果て、一者に由来する形相が届かない欠如態であるがゆえに非存在ないし無であり、質料であるとされる。こうした立場を知り、アウグスティヌスは最後にキリスト教に到達した。

研究者は多くの場合、アウグスティヌスにおける悪ないし罪の問題には注目しても、それを弁神論として読むことは少ない。だ

が、アウグスティヌスはすべての問題を神との関係において捉えており、そうなれば、悪の問題は当然弁神論の問題とならざるをえない。また、歴史的に見ても、その他の様々な領域におけると同様、弁神論問題においても後世に決定的な影響を与えているのである。

## 二

アウグスティヌスにおける弁神論問題は、彼がキリスト教受洗のための準備をしていた頃に書かれた著作『秩序論 de ordine』に、既にして明確に現れている。その冒頭に掲げられた、「神が人間を氣遣い、それでいて人間に関わって至る所こんな大きな歪みが広がるということがいかにして起こったのか」(同、I、一、二)という問いは、明らかに弁神論問題である。

悪は秩序を外れたものであるように見える、だが、神がこの世界に秩序を与えたのである以上は、悪は秩序の外に生じることはできない、では秩序とはそもそも何なのであり、悪とは秩序にとって、すなわち、神にとって、何であるのか。

当時の実際の対話を写す体裁のこの著作は、アウグスティヌス自身や友人の他、アウグスティヌスに大きな影響を及ぼした母親モニカも登場するが、この中に議論をリードする中心人物はおらず、またその内容も、後半になると悪の問題から離れ、「神的秩序」を反映すべき学問の問題へと話題を移し、問題は未解決のまま

まに終わっているかに見える。しかし、その転換直前のモニカの発言には注目すべき点がある。

「私は、神の秩序の外に何ものも生じ得なかったとは思いません。というのは、生じた悪そのものは決して神の秩序によって生じたのではないからです。けれども、かの正義はそれ「悪」が秩序付けられないままに放置するのではなく、それに相応しい秩序へと連れ戻し、押さえ込んだのです」(同、II、七、二三)。

悪は秩序が生み出したのではなく、秩序の外部として生じた。つまり、神が悪を作ったものではない。しかも、それもやがて秩序内に組み込まれる。その、いわば再秩序化の働きが神の「正義」である。

## 三

しかし、これは解答の一部にすぎない。というのは、そうであれば、神が正義によって正すべき悪ないし罪は、神が作ったのであれば、どこから生じてきたのか、ということになるからである。だからこそ弁神論問題は、『自由意志論 de libero arbitrio』において再び取り上げられることになる。冒頭、対話の相手エヴォディウスが「お願いします、神は悪の創造者でないかどうか、お教え下さい」(同、I、一、一)と問うのに対して、アウグスティヌスはまず、「われわれが悪と呼び習わしているのには二つ

の仕方がある。一つには何らかの悪をしたと言う場合があり、他に、悪を被ったと言う場合がある」と答える。「神が正義であるからには、神は善人に報いを与え、悪人に罰を下すのであり、悪を被る者にとつての悪とは、この罰のことである」。

ここでは、『秩序論』で得られた再秩序化としての正義の観点  
が活かされ、「被る悪」が罰として明確に捉えられるようになる  
一方、新たに「なす悪」が問題とされている。この「なす悪」こそ悪の本質的なものである（フォルトゥナトゥス駁論 *contra Fortunatus*、一五）。ただ、この悪の創造者は神ではないという結論は既に示されている。これは神がなす悪ではなく、われわれがなす悪だというのである。だが、そうだとすれば「われわれはどこから悪しき行いをなすのか」（自由意志論、一、三、六）が問われねばならない。しかし悪の原因の探究にあたっては、「君が今日に見える事実そのものの中に外から悪を求めている限り、袋小路に陥らざるをえない」（同、一、三、八）。実はこれはマニ教時代のアウグスティヌス自身の姿であった。ここでのアウグスティヌスは既にマニ教を乗り越え、悪は外から来るものではなく、むしろわれわれ自身の内部にあるのだと考える。われわれはそれを自らの自由な意志によってなすというのである。それによって、悪の責任は人間に帰せられ、神は免責される。

しかし、悪をなすのはわれわれであったとしても、自由に悪をなすことができるようにわれわれを作ったのは神である。となれば

ば、やはり悪の最終責任は神にあるのではないか。しかし、

「それによって罪が犯されるからといって、そのために神が自由意志を与えたのだと信じてはいけない。つまり、自由意志を与えられねばならなかった十分な理由は、それなしに人は正しく生きることができないから、ということである」（同、II、一、三）。

人間が自由意志を与えられているのは、われわれが悪を犯すこともできるなかにあって正しく生きるそのためである。マニ教に対する幾つもの批判書、例えば『二つの魂について *de duabus animabus*』などでも強調されているように、もしわれわれが自由でないならば、したがって善をなすことも悪をなすことも決定されているのならば、それはもはやわれわれに責任を負える善でも悪でもない。そして、そうであるなら、それを裁く神の正義もありえないことになる。

自由意志はわれわれが正しく生きるために神から与えられたものであるにもかかわらず、人間はそれを悪用してしまうこともある。それが自由意志によって犯されたものであるがゆえに、悪ないし罪はわれわれ自身の責任にかかるものであり、神に責任はない。

#### 四

しかし、ここでもまた問題は完全には解消しない。なされた悪を正すという意味で神の正義が実現されるのならば、神はわれわ

れが悪をなすことを望んでいるのか、われわれが悪をなすことによつてしか神は正義でありえないのか。

この問題を扱う『自由意志論』後半は、神の存在証明を詳細に展開するが、ここで観点は大きく転換される。アウグスティヌスの解答は、一言で言うところの絶対的な善の立場ということになるだろう。正義は悪を前提とするのではないかという問いは、われわれの前にある善悪を相対的に捉えてこそ成り立つ問いである。神の正義とわれわれの悪とを並列に並べていることになる。しかし、真に神の観点が入つて来るとき、そうした前提そのものが根本的に変更されねばならない。この時期のアウグスティヌスの手になる、小さいけれども包括的な著作『真の宗教について *de vera religione*』は、そのことをよく示している。

「最高の本質は存在するすべてのものを存在 *esse* ならしめており、そのゆえに本質 *essentia* と呼ばれるのである」(同、II、一一、二二)。

言うまでもなく、この「最高の本質」なるものこそ神である。「どんな生命も神からでない生命というものはない。なぜなら、神は確かに最高の生命であり、まさに生命の源そのものだからである」(同、II、一一、二二)。

このように、存在はすべて神が存在を与えることに由来する。これがすなわち神による創造に他ならない。そして、存在を与えることはすなわち恵みであり、それゆえに、「存在するものは、

それが存在する限り、善である」(同所)。

こうしてアウグスティヌスの立場は、神の創造したもののなか  
に善悪の別を見いだすというのではなく、そのすべてを、神が創造したものであるがゆえに善なるものであるとする立場である。その意味で神は絶対的に善なのであって、悪がなされた後に再秩序化を行うという意味で正義ではなく、したがって自身の正義のためにわれわれの罪を必要とするようなことはない。したがって、われわれが罪を犯してしまふことの責任を神に押し付けることもできない。これがアウグスティヌス弁神論の中心なテーゼとなる。

存在するものはすべて善いものである。そして、存在するものはすべて神によつて作られた。神は善いものである。しかし、そうだとすれば、なおさら悪が何であるのか。

「すべての善は神からのもの、それゆえ、神によらないで自然本性はない。したがって、われわれが罪であると認めたとの背反の運動は、欠陥のある運動であるが、すべての欠陥は無からくるのであるから、その運動が何に由来するかを考えてみよう。そうすれば君は、それが神に属さないことを決して疑わないだろう」(自由意志論、II、一九、五四)。

アウグスティヌスが到達したのは、神の創造した存在に善に対する、無としての悪という考え方である。これは、ある意味で言うところの新プラトン主義的な観点であると言ふことができるかもしれ

ない。しかし、決定的に異なるのは、新プラトン主義における一者からの流出が必然的なものであるのに対して、キリスト教的な神の世界創造は神という人格的な存在による倫理的な行いであるということである。われわれを含めてあらゆる存在が善であるのは、それが神によって与えられたもの、神の恵みであるからである。

それに対して、悪は非存在であり、実体を持たない。したがって、そうした無であるところの悪を神は産み出すことができない。ここでは、マニ教とは違って神と悪とは対立しない。というのは、悪が無である以上は、対立すべき何ものかではないからである。実際、無は何ものによっても与えられないがゆえに無であるはずである。

ここに至って、「神が悪の創造者であるのではないか」という問題あるいは疑いが、すなわち弁神論そのものが、それ自体としてある種の背反ないし転倒に基づくものであったことが明らかにになる。それを明らかにするのが、アウグスティヌスの言う「真の宗教」の立場であると言いうこともできるであろう。その意味では、弁神論とは真の宗教以前の問い、そこへと至る途上で現れる問題であることになる。悪ないし罪とは神への背きであって、そうである以上「われわれは神を悪の創造者ということはできない」のは自明である。なぜなら、悪が無である以上、悪ないし罪とは神から来ないものの謂いであることになるからである。

「君のこの問いに、知らないとな私が答えるなら、おそらくもっと悲しませるかもしれない。けれどもこれが本当の答えなのだ。なぜなら、無いもの「無であるもの」は知られえな  
いのだから」(同所)。

こうして、自由意志を悪へと向かわせる原因、悪の由来の問いに対する答えは、「それは無い」あるいは、「それは無である」ということになる。つまり、自由意志の原因は無であり、したがって、自由意志は原因がないという意味での無原因でもある。

## 五

しかしまだ問題は残る。自由意志には原因がない、したがって意志の働きそのものの原因はそれ以上探究できない。しかし、そうした自由な意志の働きがなぜ可能となっているのか、という問題である。アウグスティヌスはそれに対して、われわれ自身が無から生み出されたものだからであると言う。

「なぜ彼らは墮落するのか。それは彼らが可変的だからである。ではなぜ可変的なのか。最高度に存在していないからである」(真の宗教、Ⅲ、一八、三五)。

神の他には何も無い。したがって世界は、何らかの材料を素に作られたのではない。創造とは無からの創造である。しかしそのためにこそ、神によって創造された世界は必然的に無を孕む。つまり、最高度に存在する神に対して、われわれは欠如を負った存

在である。神から作られたという点では善ではあっても、それは最高の善ではなく、無から創造されたものであって、無を孕む限りにおいて、被造物は可変的なものである。この可変性こそが人間の自由の可能性を与える。既に見たように自由は人が正しく生きるために与えられた。それが自由の倫理的な意味であった。しかしそれは、存在論的に言えば被造物の可変性によるものであり、同時に、悪への可能性をも孕む。

新ブラトン主義においてもやはり、神ないし一者は絶対的な善であり、逆に、悪は非存在である質料だとされていたが、アウグスティヌスの思想は「無からの創造」というキリスト教的な前提の上に成り立っている。ここにおいては、存在は神によって与えられた恵みであり、そうであるからこそ善である。しかし同時に、被造物は、それらが全くの無から創造されたものであるがために、つまり、神から存在を与えられているということは、同時に神なしには無であるがゆえに、われわれは、善でありながら、同時に無を孕むものであり、そこに可変性が生じる。これがわれわれの意志の自由、あるいは罪の可能性として現れてくる。これは単なる可能性にすぎないが、それが無に由来する以上、これは神の創造したものではない。神は悪の可能性すら産み出さない。

しかし、そうした、実体がなく原因もない悪に、なぜわれわれは苦しむのか。なぜ悪はリアルであるのか、無であるものがなぜ悪となるのか。

「頽落とは悪い本性へと向かうことではない」(神の国 9  
Civitate Dei, III, 1)。

神によって創造された自然本性はそれ自体善であり、したがって悪い本性といったものはあり得ない。悪を悪たらしめるのは、それ自身において無を孕むわれわれの意志のゆえにである。アウグスティヌスは、人間の内なる無を、そこへと志向する意志によって発現させることをこそ悪だと考える。しかしここで決定的に重要なのは、アウグスティヌスが問題としているのが欠如を引き起こす運動だということである。アウグスティヌスは無としての悪という考え方を、悪の原因としての自由意志という考え方と結合することで、悪の起源をより深く追究する。罪ないし「なす悪」とは欠如である。しかし、その欠如を引き入れることによって悪となすのは自由意志の運動である。しかし、運動は方向を持つ。悪とは無へと向かう運動である。だとすればそれは同時に、存在を齎す善なるものである「神に対する意志の背き」(同所)である。

「身体の享受を喜び、神をないがしろにする生命は、無へと落ちてゆく。これこそが邪悪ということなのである」(真の宗教、II, 一一、一二)。

無へと向かうということは、逆に言えば、神と神の与えた恵みである存在とは逆方向に向かうということであり、したがって、無へと向かう自由意志の運動は、存在を与え・創造する神の人格

そのものからの背きとなる。そうした背きが実現するための条件が、われわれの内なる無である。

## 六

かくしてアウグスティヌスの弁神論は、(1)悪は無であり、かつ、悪の可能性はわれわれが無から創造されたことよって必然的に内包しなければならぬ無によつて成立すること、したがつて、存在を与える者である神はあくまで善意であつて、悪の根拠には関わらないこと、(2)そうした無から創造されたものであるがゆゑにわれわれは可変的であり、それに基づく自由意志がわれわれの内なる無へ向かう運動によつて、神に背くという悪が現実的に招来させられるのであつて、神には悪の責任はないこと、(3)自由意志によつてわれわれの責任において引き起こされた悪に対しては、それを正す罰を正当に被らしめることによつて秩序が保たれ、神の正義が成就すること、という三つの柱から成る。

(1) まず第一に、悪の根拠となる無からの被造性は、いわば弁神論の存在論的な条件である。同じく悪を非存在であるとする新プラトン主義では流出の果ての質料が悪であるのに対し、アウグスティヌスは、神の世界創造がそこから行われる「無」が、悪の可能性を齎すものだとする。しかし、そうした神による創造はものに存在を与えること、恵みであり、その意味で神が善であるのももちろん、神の創造したものですべてが善であるとき

れる。したがつて無は悪の可能性にすぎず、しかも、世界が無から創造されるしかなかった以上、その可能性すら、神が意図したものではない。

(2) しかし、アウグスティヌスは、悪を単なる非存在と観ているのではなく、そのリアルさを観ている。そこで彼が見いだしたのが、われわれの内面にある意志の運動である。これは、無からの被造性が悪の可能性に留まるのに対して、悪が発現するための現実根拠、悪の原因であると言ふことができる。そしてそれが、われわれの自発的な決意によるものであること、したがつて、われわれは神から、正しく生きるために与えられた自由を悪用していること、また、とりわけそれが、神という人格に対する背きとして考えられていることが注目される。つまり、無からの被造性が、新プラトン主義の哲学をキリスト教的に読み替えた悪の存在論的原理であるのに対して、この意志の運動は悪の倫理的な原理であり、キリスト教固有のものであることを意味するからである。「悪」とは常に何ものかにとつての、何者かに対する「悪」であるとすれば、アウグスティヌスが悪の本質とみなすのは、「神に対する背き」としての悪ないし罪である。というのも、神が、恩寵を与える善なる人格であるからに他ならない。こうして、悪が自由意志によるものであるとすることで、アウグスティヌスは、神の悪に対する責任を排除するといふ弁神論的立場を提出し、逆にそれを、われわれ自身

の神に対する背き、神に対する罪であるとする。

(3) しかし、弁神論という枠組みを通すことによって、構造的に言えば、自由意志の問題と並んで重要となるのが、罰としての「被る悪」である。というのは、これによってこそ神は正義であることになり、アウグスティヌスの弁神論が文字通りの意味で成立し、完成されるからである。もしこの点がなかったとすれば、われわれは自由意志によって悪を犯す、というだけに留まってしまふ。その意味では、多くの論者が、悪の問題に関しては不完全な著作だとする『秩序論』も、そこにおいて既に再秩序化による神の正義という論点が提出されている点で、独自の意味を持つと言わなければならない。

むしろ、アウグスティヌスが真の意味で「悪」とみなしていたのは自由意志による悪、すなわち「罪」である。だが、成熟期のアウグスティヌスの言葉には、なす悪と被る悪、罪と罰とが対比的に登場している。例えば『告白 Confessiones』においても、

「全自然を秩序付ける者にして創造する者、ただし罪に関してはただ秩序づける者のみにしてまします者、主よわが神よ」(下、十、一六)

と言われている。ここで「自然」と呼ばれているのは、アウグスティヌスの用法では存在のことである。これは神によって創造され、秩序付けられるもの、したがって善なるものであった。一方、神が「罪に関してはただ秩序づけるだけの者」と呼ばれているの

は、神が罪の創造者ではなく、したがって、「なす悪」としての罪は神の創造したものではないこと、したがって無であること、しかし、「私」が自由意志によって犯した悪なる罪の引き起こした秩序の乱れを、「被る悪」としての罰によって正義の秩序にもたらずのもやはり神であるからである。ここには、弁神論の議論が集約されており、罰を与えることによる再秩序化が不可欠な要素として登場している。

かくて「被る悪」としての罰は罪の結果であり、その罪の原因は自由意志であり、そしてその根底に、われわれの内なる存在の条件としての「無」がある。この三つは重層的な構造をなしていることになる。

## 七

こうしたアウグスティヌス弁神論を歴史的に見るなら、その三つの柱は、ライブニッツがその『弁神論』において提示している三種の悪の分類に対応するのではないかと見ることが出来る。また、われわれは無からの被造性を悪の可能根拠、意志の働きを悪の現実根拠と考えたが、悪の可能性と現実性との区別は後のシェリングが明確にするところである。アウグスティヌスと彼らの対比が今後の課題となる。

しかし、アウグスティヌス自身に関しても課題は残る。われわれが重視した「被る悪」ないし「罰」は、悪の原因としての「自



由意志」ほど強調されないのではないか、という異論も提出されるであろうし、一言で言えばこれは因果応報説であって、それならばアウグスティヌスを持ち出すまでもないのではないかととも思われよう。そして、実際にそれはある意味で正しい。というのは、われわれが焦点を当てたのは弁神論の構造であるが、そうした構造そのものがアウグスティヌスの思想の発展の結果であり、しかもアウグスティヌスはその死に至るまで問題の深化を止めなかつたからである。われわれの見たテキストは、主に初期のものに限られており、アウグスティヌスの思想の全体には到底及ばない。われわれは上に三つに集約した論点を更に詳細に辿らなければならぬとともに、彼の弁神論がその思想全体にどのような位置付けられるかも考えねばならない。

また、たとえ弁神論の歴史について一定の見通しが立ったとしても、問題はそれだけでは終わらない。というのは、弁神論では、神の善性、正義を主張するに至るといふ結論は常に先取りされており、また、論点のバリエーションもそれほど多くあるわけではないからである。弁神論の重要性は、神の正義を論じるという点にあるというよりも、神に悪の責任を問い、あるいは神を擁護するわれわれ自身、人間そのものをどう考えるかという根本的な問題を浮かび上がらせるところにある。弁神論とはその意味で、われわれ自身への問いである。

\* テキストは基本的に Sancti Aurelii Augustini opera omnia. in: P. Migne, Patrologiae cursus completus, series latina, vol. 32-37, Paris, 1841-1849 に于ける。

(ひらお・まさひろ、哲学・倫理学、立命館大学非常勤講師)